

(別紙2)

審査結果の要旨

氏名 越門 勝彦

本論文は、ジャン・ナベールによる人間の自由と悪の経験の分析を克明に辿り、自己形成する人間の有り方を解明したものである。ナベールの諸著作は二〇世紀前半にフランスで主流思潮となった反省の哲学の最高峰をなすものであるが、その後の実存哲学と現象学との流行という歴史ゆえに、また文体の取っ付きにくさもあって、本格的に研究されることは極めて少なかった。かかる状況にあって、本論文は、ナベールの仕事をアクチュアルな問題へとつなげ、その思想の豊かさを明らかにすることを目論んだ。

第一部は、ナベールの言う「自由の内的経験」を、自覚的な選択や迷いの場面から始まり熟慮し決断に至るまでの過程において、つぶさに検討している。「どうしたらよいか」と問うこと、或る価値づけをもつ諸動機を我がものにする事、そして、意識において私が行動主体として立ち上がること、これらの有りようを、克明に浮かび上がらせている。

第二部は、反省の役割を考察する。反省が始まるきっかけが否定的経験にあること、反省によって人は統一性を回復し、「自由への信」を形成すること、そして人格の生成がみられることなどをみることが主たる内容である。ここでの本論文の功績は、ナベールの考察のうちに伏在する反省の二種を明示化したことである。

第三部では、善悪を形式主義的に捉えるカントを批判するナベールの議論を取りあげ、道德の基礎に感情があることを明らかにしてゆく。第三部の特徴は、現代におけるさまざまな道德論(道德の基礎づけ)との対比においてナベールの道德哲学の輪郭を明らかにし、のみならず、そもそも哲学とはいかなる営みかということに立ちかえりつつ、論者独自の展望を見出すまでに至っていることにある。

以上のように、本論文は、埋もれがちなナベールの仕事を現在の道德哲学における論争を踏まえつつ掘り起こし、その思想の豊かさを明らかにしたものである。そこには確かに、ナベール自身が取りあげた主題に制約され、具体的な行動が相手にする諸対象と行動を取りまく状況とについての分析が欠けている憾みはある。この欠如は、論者が、内閉的な意識が問題ではないことを示すために他者との交流という側面に目を向けたことによっても補えるものではない。とはいえ、本論文が、ナベールという二〇世紀前半の最良の哲学者の仕事を甦らせ、そこに、現代の諸問題の解決に生かされるべき豊かな脈があることを示した意義は極めて大きい。

よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。